

# 文化

2012年(平成24年)5月12日(土曜日)

日刊



発行所  
山形新聞社  
〒990-8550  
山形市旅籠町2-5-12  
電話 代表023(622)5271  
©山形新聞社2012

「七世若菜の事」思い出す桜かな。(芭蕉)

東日本大震災から1年がたつこの春4月、桜が咲く東京の梅若能楽学院会館で鎮魂の新作能が上演された。その名も「ポトマック桜」。「憲政の父」と今も呼ばれる尾崎行雄(豊彦)が、東京市長だった1912年に3

## 舞台評

千本の桜を米國に贈り、首都ワシントンのポトマック河畔に植樹された史実にもとづく能である。日露戦争の勝利に浮かれていた日本で、尾崎は不戦と民主主義に生涯をかけ、国際平和を願っていた。

観世流能楽師らによる公演は小ぶりながら能の古式に則りつつ、音楽も詞章も極めて斬新。

能「ポトマック桜 尾崎行雄とエイブラハム・リンカンの夢」

劇場には欧米諸国の大使をくむ約400人が詰めかけた。ポトマック河畔でも、奇贈100周年を祝う桜祭りが盛大に行われたと聞いている。時宜を得た企画であり、米國公演への期待を高める出来栄であった。

## 日米友好の証し、自然の美讃え

桜の木を本、そして下方にぐるりと設えられた桜の枝々に、目を奪われた人も多かったはず。思わず触れてみたくなる美しき見事な作り物(制作・前野博紀)である。淡いピンクと薄紫の衣装で登場して舞う桜の精と、桜の花々が、舞台の上と下とで節目の春を寿いでいた。

と、米國の二分割を避けるため突入するほかなかった南北戦争であったが、死者の数は南北両軍で62万人を超えるとも言われている。北軍の勝利で國はひとつに保たれたものの、大統領と「戦争による決着」という決断をとりざるを得なかったばかりでなく暗殺され、道半ばで

あるが、不断のたゆまぬ努力のなかで、つと美は立ち現れる。まさしく両者を融合させうる人材を得て、伝統の継承であり革新の気迫に充ちた舞台が創り出されていた(原作・上田邦義 作能・津村礼次郎、作詞・大倉正樹)。

通常ならほほ「何も無い空間」である能舞台だが、舞台上には

物語は、尾崎翁が娘を伴いポトマック河畔を訪れると、月明かりにリンカーン大統領の霊が現れて、桜の精が見守るなか、尾崎の肩に左手を添えて舞うという能らしい展開。随所にリンカーンの演説と尾崎が訪米時に詠んだ歌をまじえてほぼ口語体で聞き取りやすく語られる。「分裂れし家は立ち行かず」

分余にわたり、日本調のメロデーにガーシュインの曲を交えて明々として、絢爛たる演奏であった。「殺すな。戦うな」と、リンカーンと尾崎に重ねて和す地謡の声も明瞭で力強く、「汝が國人も、わが國人も、世の人すべて、心ひとつ」と詠い合った。幕切れには、桜の精に先導されてリンカーン、尾崎の順に幕の向こうへと進み入る。南北戦争開始から151年の春に、大震災にあたって「トモダチ作戦」を組みただちに救援に駆けつけた米國との友好関係のありようにも思いをいたしつつ、ずしりと重々、心に響く公演であった。(小池美佐子、アメリカ文化・演劇研究者) 4月6日、東京・梅若能楽学院会館。原作者の上田氏は鶴岡市出身、静岡大名舎教授